

國學院大學學術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵『かくれ里』の解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 針本, 正行, 山本, 岳史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000648

國學院大學図書館所蔵『かくれ里』の解題と翻刻

針本 正行
山本 岳史

はじめに

國學院大學図書館に絵巻物の体裁を持つ『かくれ里』（國學院本）が収蔵された。『かくれ里』の諸本として、東京大学国文学研究室蔵『かくれさと』^①（奈良絵本二冊、東大本）、慶應義塾図書館蔵『系びす大こくかつせん（鼠のさうし）』^②（残欠一卷、慶應本）、版本として、早稲田大学図書館蔵『系びす大こくかつせん』^③（二冊、早大本）、都立中央図書館蔵『かくれ里の物語』^④（一冊、加賀本）、などの存在が明らかになっている。國學院本の生成過程を推定するために、國學院本と他の諸本の本文との相違を確認し、さらに、挿絵の構図、詞書書写者についても、現在、國學院大學図書館に所蔵されている物語絵巻との比較検討を通して述べてみたい。

國學院本『かくれ里』の製作年代は、絵巻の体裁、本文の料紙、詞書書写者などにより、江戸時代前期の寛文・延宝期と思量される^⑤。なお、國學院本『かくれ里』の翻刻にあたっては、山本岳史氏の協力を得た。

【書誌】

一軸。表紙は紺地金糸草花文様金襴緞子、料紙は鳥の子紙で下絵は金泥草花文様。外題「か久礼里」（上巻）・「かくれ里」（下巻）とある。紙高は三三・一糎、上巻は、長さは凡そ一二・八米、挿絵は七図（内長大図が二図）、下巻は、長さは凡そ二三・一米、挿絵は七図（内長大図が三図）。両巻末に「源小泉／大和大極」の印が捺されている。

〔貴四三四一〇二〕

一、國學院大學図書館所蔵『かくれ里』の本文

本節では、國學院本『かくれ里』（略号「國」）の本文と、東大本（略号「東」）、慶應本（慶）のそれとを、それぞれの上巻、下巻の巻頭と巻末の本文を比較検討し、國學院本『かくれ里』の特徴について明らかにしたい。⁶⁾

(一)『かくれ里』上巻冒頭の本文

- 1 國 秋・のたそかれときは．．．いと、心ほそかりしにいつとなく風・ものすこくてお花ふきまねくおりふし
- 1 東 あきのたそかれときはそらならても．．．心ほそからぬかは．．．かせ物・すこく・お花ふきまねくおりふし
- 1 慶 (本文欠落)
- 2 國 かれくゝに聞ゆむしのこゑくゝもいとあはれにきゝなし．．．名におふこよひは．．．．．新・月の
- 2 東 よはり行．．．むしのこゑくゝも．．．あはれにきゝなし侍へるなにおふこよひは秋も中・半よもなかはしん月の
- 2 慶 (本文欠落) におふこよひは秋もなかは夜もなかは新・月の
- 3 國 いろまとかにてらして二千里のほかまてくまもなし古人・の心もきかまほしとおもふよりえもきか戸ほそを

- 3 東 いろまとかにてらして二千里の外・・まてくまもなしこしんの心もきかまほしとおもふよりゑもきかとほそを
- 3 慶 色・まと・にてらして二千里の外・・まてくまもなし古人・の心もきかまほしとおもふよりよもきか戸ほそを
- 4 國 立・出・そこもしらすたとり行・ほとにみやこのひかしかも・川・・にさしかゝりみつのなかれのいとふかき
- 4 東 たちいてそこともしらすたとりゆく・・みやこのひかしかものかわりにさしかゝり水・のなかれ・いとふかき
- 4 慶 立・いてそこともしらすたとり行・・宮・このひかしかものかはらにさしかゝり水・のなかれ・いとふかき
- 5 國 をこしなかまてまくりあけてさ夜ことに音をのみなく千鳥・あしになりやうくうちわたりてみなみをさして
- 5 東 をこしなかまてかゝ・・けてさ夜ことにねをのみなく千とりあしになりやうくうち渡・りてみなみをさして
- 5 慶 をこしなか・・まくりあけて小夜ことに音をのみなく千鳥・あしになりやうく打・わたりてみなみをさして
- 6 國 ゆくほとにかの大佛・や三十三間・をゆん手にみなし・・・一二のはしやほうしやうしもみちいろこき
- 6 東 行・程・にかの大ふつや三十三けんをゆんてに・なして打過る・・一二のはし・ほうしやうしもみちいろこき
- 6 慶 ゆくほとにかの大佛・や三十三けんをゆん手にみなして打過るほとに一二のはし・ほうしやうし紅葉・いろこき
- 7 國 いなり山・松にかゝれるふちのもりこわたの野邊に出・にけりひかしのかたに物・いふこゑ聞え・たり我ならて
- 7 東 いなり山・松にかゝれるふちのもりこはたの野へに出たりけりひかしのかたにものうふこゑきこへたり我ならて
- 7 慶 いなりやま松にかゝれる藤・のもり小はたの野へに出たりけりひかしのかたにものいふこゑ聞・・たり我ならて
- 8 國 又よの人も月にはあこかれてこゝらたとらんうちよりてこよひをなかむる哥・あらはとおもひ・てたちより
- 8 東 又よの人も月にはあこかれてこゝらたとらんうちよりてこよひをなかむるうたあらはと思・ひ・てたちより
- 8 慶 又よの人も月にはあこかれてこゝらたとらんうちよりてこよひをなかむる哥・あらはと口すさひて立・より
- 9 國 みけれとも人なしかしこなるきし・・のあるところを見やりたりければさもおほきなるあなありけりそのうちに

9 東 ・ けれとも人なしかしこなるきしかけの・・・ところをみやりたれば・・おほきなるあなありそのうちに
 9 慶 ・ けれとも人なしかしこなるきしかけの・・・ところを見やりたれはいとおほきなるあなありそのうちに

10 國 いとふしきなる音こそしけれ

10 東 こそ人のものいふこそきこゆれ

10 慶 こそ人の(以下本文欠落)

(中略)

11 國 にはに立・うすふたつすゑてよねをうつところもありそのよねうたをきけはおかしくもかたはらいたくそおほえける

11 東 庭・にたてうすふたつならへよねをうつ所・・もありそのよねうたをきけはおかしくも又おもしろかりけり

11 慶 (本文欠落)

12 國 風もなふきそつゝみもかれそときくゝさなへのはにはいなこもつきそとらけのねこのこゑをもちやよ

12 東 ・・・・・さなへのはにはいなこもつきそとらけのねこのこゑをもちやよ

12 慶 (本文欠落)

右に掲げたように、『かくれ里』上巻冒頭の本文において、東大本、慶應本との主な相違は、1行目國學院本「秋のたそかれときはいとゝ心ほそかりしにいつとなく」とあるところ、東大本「あきのたそかれときはそらならても心ほそからぬかは」であり、2行目國學院本「かれくゝに聞ゆむしのこゑくゝもいとあはれにきゝなし名におふこよひは」とあるところ、東大本「よはり行むしのこゑくゝもあはれにきゝなし侍へるなにおふこよひは秋も中半よもなかは」であり、10行目國學院本「いとふしきなる音こそしけれ」とあるところ、東大本「こそ人のものいふこそきこゆれ」であり、12行目國學院本「風もなふきそつゝみもかれそときくゝさなへのはにはいなこもつきそとらけのね

このこゑを「いやよ」とあるところ、東大本「さなへのはいなこもつきそとらけのねこはこゑを「いやよ」である。また、慶應本の本文は一部欠落があるものの、東大本に近似しているといえる。なお、2行目の國學院本「かくれ」に「聞ゆむしのこゑくもいとあはれにきゝなし」と、東大本「よはり行むしのこゑくもあはれにきゝなし侍へる」の箇所は、國學院本が聴覚的、東大本が視覚的な秋の虫の鳴き声の表現であり、東大本が國學院本よりも語り物的であるともいえる。

(二)『かくれ里』上巻末尾の本文

- 1 國 天・地はさ・なきもの也えらまざるをはみちとするいはんやものにはとりゑありせうまうのゆくにもあかき
- 1 東 てんちはさわなきもの也えらまぬ・を・みちとするいはんや物・にはとりえありせうまうのゆくにもあかき
- 1 慶 天・地はさはなきもの也えらまざるをはみちとするいはんや物・にはとりへありせうまうのゆくにもあかき
- 2 國 とりえにするとかやあしからんねすみにもそのとくとりえのあるゆへに十二支のそのなかにねの一支を入・られ
- 2 東 とりえにする・・あしからんねすみにもそのとくとりえのあるゆへに十二支のその中・に子の一支を入・られ
- 2 慶 とりえにするとかやあしからんねすみにもそのとくとりえのあるゆへに十二支のそのなかに子の一支をいれられ
- 3 國 正月のいはひにも子の日の松をそしやうくはんす・四方をさすにもきたをもつてねの方・となつて水をやう
- 3 東 正月のいはひにも子の日の松をそしやうくはんする四方のうち・北・を・・ねのかたとなつて水をやう
- 3 慶 正月のいはひにも子・日の松をそしやうくはんする四方のうち・北・を・・ねのかたとなつて水をやう
- 4 國 いくせしむるなりやくし十二神のうちひきや羅大将はかしらにねすみをいたゝきて子の時・をまもり給ふ
- 4 東 いくせしむる也・葉・師十二神のうち略迦・羅大将はかしらにねすみをいたたきて子のときをまもり給ふ
- 4 慶 いくせしむるなりやくし十二神のうちひきやら大将はかしらにねすみをいたゝきて子のときをまもり給ふ

- 5 國 十一月のねまつりもふつきをねかふにりしやうあるゆへそかしこのことほりをしり・給・はぬゆへにふこつ
 5 東 十一月のねまつりもふつきをねかふにりしやうあるゆへそかしこのことほりをしらせたまはぬゆへ・さやうに
 5 慶 十一月のねまつりもふつきをねかふにりしやうあるゆへそかしこのことほりをしらせ給・はぬゆへにさやうに
 6 國 ことを申さるゝことこそおかしけれどへは日ころ申たんする中なれはすこし心にあはさることをもかん
 6 東 のたまふ．．．．．おかしさよたとへは日ころ申たんする中なれはあしからん．．．．．事・をもかん
 6 慶 の給まふ．．．．．おかしさよたとへは日ころ申たんする中なれはあしからん．．．．．ことをもかん
 7 國 し給ひてこそはみちならぬ．．．．．このうへはそれかしか手のものにおゐてはゆひ・なりともさし給・は、
 7 東 し給ひてこそ・みちとはいふへけれ此・うへはそれかしかてのものに．．．．．ゆひをなり共さ・したまは、御
 7 慶 し給ひてこそ・道・とはいふへけれ此・うへはそれかしかねのものに．．．．．ゆひをなりともさし給・は、御
 8 國 うらみたてまつるへしそのうへちやうすひき木をはかたくそんし候はずと中／＼いかりの給・へはししやの
 8 東 うらみ申．．．．．へし其・上・ちやうすひき木をかたくまとひ申すましとあらゝかにの給・へは．．．
 8 慶 うらみ申．．．．．へしそのうへ茶・うすひき木をかたくまとひ申すましとあらゝかにのたまへは．．．
 9 國 こまいぬけうにして御まへをまかりたちにしのみや・さしてかへりつゝしゝうのこさいをのへたりけり
 9 東 こまいぬおとろきて御まへをまかりたちにしのみやに．．．かへりて・此よしかくと申けり
 9 慶 こまいぬ（以下の本文欠落）

右に掲げたように、『かくれ里』上巻末尾の本文において、東大本、慶應本との主な相違は、6 行目國學院本「こ
 とを申さるゝことこそおかしけれ」とあるところ、東大本・慶應本「のたまふおかしさよ」であり、8 行目國學院本
 「うらみたてまつるへし」とあるところ、東大本・慶應本「うらみ申へし」であり、9 行目國學院本「こまいぬけう

にして御まへをまかりたちにしのみやさしてかへりつゝ、うのこさいをのへたりけり」とあるところ、東大本「こまいぬおとろきて御まへをまかりたちにしのみやにかへりて此よしかくと申けり」である。また、慶應本の本文は一部欠落があるものの、東大本に近似している。なお、6行目國學院本「申さるゝ」が東大本・慶應本「のたまふ」、8行目國學院本「うらみたてまつるへし」、東大本・慶應本「うらみ申へし」とあるように、國學院本と他本とは敬語法に相違があるといえる。

(三) 『かくれ里』下巻冒頭の本文

- 1 國 さるほとにこまいぬはいそきにしの宮・にはせかへり・このよしかくと申ければえひす三郎とのおほきに
- 1 東 ・かくてこまいぬは・・・にしのみやに・かへりて此・由・・を申ければゑひす・殿・こころへぬおほ
- 2 國 いかり給ひてそのきならば津のくにせい・・・をことくくふみつふしそのゝちつはものをあつめてゑいかく
- 2 東 せかな・・・そのきならば津のくにのねすみとをことくくふみころしそのゝちつはものをあつめてひゑさん
- 3 國 にをしよせ・・・・・しゆうをけつせんになんのしたいあるへきなんち身内のせいを
- 3 東 にをしよせ大こくてんとせめたたかひ一せんのうちにしゆうをけつすへしとて・・・・・
- 4 國 もよほしふるへきよしおほせふくめらるゝにしの宮・は申におよはす津の國すま・・・一・谷わたなへかんさ
- 4 東 こまいぬをつかはし給ふに・・・・・にしのみやは申にをよはす・・すまのうら一の谷わたなへ・・・
- 5 國 きふくしま江・口よとやわたやまさき・・・・・のねすみとも此よしをきゝ・・・とるものもとりあへすおや
- 5 東 ・ふくしまごん口・・・・・やまさきやはたあたりのねすみとも此由・をつたへきゝとるものもとりあへすおや
- 6 國 をつれ子をかゝへてゑいかく・ににけのぼる事おひたゝしえひすとの・きこしめしさらはくんせいをあつめん
- 6 東 をつれ子をかゝへてひゑいさんににけのぼる・・・・・えひすとのはきこしめしさらはくんせいをあつめよ

- 7 國 とてまつりう宮・・・へししやをそ立・らるゝりうわうはきこしめし・かゝるふしきの事こそあらね日ころは
 7 東 とて・りうくうしやうへつかひを・たてらるゝりうわうはうけたまわりかゝるふしきの事こそあらねひころは
 8 國 さしも一しよに住ゐしてふくの神とあふかれ鳥のつはさのことくにてひとつかけてはかなはぬ事そかし
 8 東 さ・も一しよにすまゐてふくの神とあふかれしよ人は是をあかめたてまつる・・・
 9 國 しかるに今・このことの出来してたかひにつはものをあつめ給ふ・そめつらしきちんしなれ・さりながら
 9 東 しかるにいまこのことの出来して・・・つは物・をあつめ給ふこそめつらしきくはたてなりさりながら
 10 國 のかるへきにあらすいそきせいを・あつめよとてそうかいにふれをなしそのせいをめさるゝに・
 10 東 のかるへき仰ならすさらはつはものあつめよとて大海・にふれをなしちやくたうこそつけにけれ

右に掲げたように、『かくれ里』下巻冒頭の本文において、東大本との主な相違は、2～4行目國學院本「つはものをあつめてゑいかくにをしよせしゆうをけつせんになんのしたいあるへきなんち身内のせいをもよほしふるへきよしおほせふくめらるゝに」とあるところ、東大本「つはものをあつめてひゑさんにをしよせ大こくてんとせめたたかひせんのうちにしゆうをけつすへしとてこまいぬをつかはし給ふに」であり、8・9行目國學院本「鳥のつはさのことくにてひとつかけてはかなはぬ事そかししかるに今このことの出来してたかひにつはものをあつめ給ふ・そめつらしきちんしなれさりながら」とあるところ、東大本「しよ人は是をあかめたてまつる しかるにいまこのことの出来してつは物をあつめ給ふこそめつらしきくはたてなりさりながら」である。とくに、2～4行目東大本「つはものをあつめてひゑさんにをしよせ大こくてんとせめたたかひせんのうちに」とある箇所は、東大本では恵比須軍が比叡山に押し寄せ、大黒天軍との戦の臨場感が表現されているとはいえる。

(四) 『かくれ里』下巻末尾の本文

- 1 國 さては和平・のことなれば・．．．ほていくわしやうそれかしのしゆくしよへ御いりあれとてえひす大こく
- 1 東 さて・わほくのあつかいとてすなわちほていくわしやうそれかしのしゆく所・へ御入・あれとてえひす大こく
- 2 國 もろともに二てうとみのこうちほて・や町にしやうしたてまつり御さかつきをそいたされけるめくれやく／＼さか
- 2 東 もろともに二てうとみのこうちはていや町によひ入・奉・．．り御さかつきをそ出・されけるめくれやく／＼さか
- 3 國 つきの千世もかはらぬときは木のえたもさかゆるわかみとりひさしき世までもはひこりてさかへん事こそうれ
- 3 東 つきの千代もかはらぬとき木ノえたもさかゆる若・みとり久・しまてにはもしけり・．．．
- 4 國 しけれとて・．．まひあそひ給ふいさやむかしをおもひてのすまひをはしめ申さんとてえひすとはきやうしに
- 4 東 ・．．うたひまひあそひ給ふいさやむかしをおもひてのすまふをはしめ申さんとてえひすとはきやうしに
- 5 國 て大こくほてい立・あかりとり給ふすまひには大そりこそりみつくるまかものいれくひはまかせの手四十八手を
- 5 東 ・大こくほていたちあかりとり給ふすまふには大そり小そり水・くるまかもの入・くひはま風・のて四十八手を
- 6 國 とりくたき十二のひてんをあらそひてたかひに聞ゆる手とり・なればさらにせうふもなかり・けりかくて
- 6 東 とりわけ・十二のひてんをあらそひてたかひに聞ゆる・とりてなればさらにせうふも見えさりけり
- 7 國 時うつりけるほとにえひすとのうちわをあけさてもとりたり二人ともに取・たり／＼とかんし給ふ御こゑみ、
- 7 東 ・．．
- 8 國 のあたりにと、まりてねさめのとこにまくらをあけつらく／＼これらをおもふにくわうりやうか一炊・さうしか
- 8 東 のあたりにと、まりてねさめのとこにまくらをあけつらく／＼これ・をおもふにくわうりやうか一すいせうしか
- 9 國 こてふ五十年も百年・もうしのよたれのはてもなく松のはのちりうせすつきぬ御代こそめてたけれ

9東 こてう五十年も百ねんもうしのよたれのはてもなし松のはのちりうせすつきぬ御代こそめてたけれ

右に掲げたように、『かくれ里』下巻冒頭の本文において、東大本との主な相違は、2〜4行目國學院本「めくれや／＼さかつきの千世もかはらぬときは木のえたもさかゆるわかみとりひさしき世までもはひこりてさかへん事こそうれしけれとて・・まひあそひ給ふ」とあるところ、東大本「めくれや／＼さかつきの千代もかはらぬときわ木のえたもさかゆる若・みとり久しきまてにはもしけりうたひまひあそひ給ふ」であり、7行目國學院本「時うつりけるほとにえひすとのうちわをあけさてもとりたり二人とも取たり／＼とかんし給ふ」とあるところ、東大本「さてもとりたり二人共・にとりたり／＼とかんし給ふ」である。とくに、7行目國學院本「時うつりけるほとにえひすとのうちわをあけ」とある箇所は、恵比須が相撲をしきる様を表現している。

また、『かくれ里』の主題は、下巻末尾に、「さても和平のことなればほていくわしやうそれかしのしゆくしよへ御いりあれとてえひす大こくもろともに二てうとみのこうちほてや町にしやうしたてまつり御さかつきをそいたされけるめくれや／＼さかつきの千世もかはらぬときは木のえたもさかゆるわかみとりひさしき世までもはひこりてさかへん事こそうれしけれとてまひあそひ給ふ」と、祝儀性を背景とした宴席が始まり、大黒天軍と恵比須軍の和解を経て、恵比須が行司となり、大黒天と布袋とが相撲をとり、気がつく、「御こゑみ、のあたりにと、まりてねさめのとこにまくらをあけつら／＼これらをおもふにくわりやうか一炊さうしかこてう五十年も百年もうしのよたれのはてもなく松のはのちりうせすつきぬ御代こそめてたけれ」と、すべて夢であったと、物語は終焉するのである。

以上のように、(一)、(二)、(三)、(四)の検討をふまえると、國學院本『かくれ里』の本文と、東大本、慶應本のそれとの関係は、東大本の本文と慶應本のそれとは近似しているという事実、敬語法の相違はあるものの、主題に関する相違がなく、三本が諸本系統を史的展開のもとに生成し、構築されていると断定することは難しい。國學院本

をはじめ、東大本、慶應本の『かくれ里』は、江戸時代の初めに仮名草子作家による新作『隠れ里』のもとに製作されたものと思量されるのである。

二、『かくれ里』の挿絵の構図

本節では、國學院本の『かくれ里』には上下巻、それぞれに七図の挿絵がある。それぞれの当該場面に相当する本文を引用し、場面の要旨と人物の配置について確認した上で、國學院本『かくれ里』の挿絵の構図の特徴を示したい。

(一) 上巻の挿絵の構図

第一図は、中秋の名月に誘われた男が、法性寺、稲荷山などを経て、木幡の野辺に至り、岩陰の穴からの音を聞いている場面である。本文、「又よの人も月にはあこかれてこゝらたとるらんうちよりてこよひをなかむる哥あらはとおもひてたちよりみけれども人なしかしこなるきしのあるところを見やりたりかれはさもおほきなるあなありけりそのうちにいとふしきなる音こそしけれ」に相当する。画面中央上に雲の中に月を、左には、岩穴の前で杖をつき、腰をかがめて、穴をのぞき込む男の様を描く。慶應本も本図と同じ構図である。⁶⁾第二図は、男がのぞいた屋敷の台盤所で、鼠たちが米歌を歌いながら調理している場面である。本文、「そのよねうたをきけはおかしくもかたはらいたくそおほえける 風もなふきそつゝみにえかれそときくさなへのはにはいなこもつきそとらけのねこのこゑをもうやよ とうたひつけてあるふしのおもしろさこゑめつらかにほひありていきのはつむことにてありとなむ」に相当する。本図は二紙分の長大図で、左画面に、座敷で、まな板で魚を切る鼠、中央の画面に、鍋や釜の前で火加減を見ている鼠、井戸で水を汲む鼠、白で米をついている五匹の鼠、その後ろに横積みの米俵、右画面には、門から屋敷内をのぞ

く男、などの様を描く。本絵巻の主題である祝儀性を象徴する図となっている。慶應本も本図と同じ構図である。第三図は、岩穴の中に広がる屋敷の中の厩の場面である。本文、「又ひかしの方をみわたせは五十けんのみまやあり」に相当する。左画面の奥に、厩で、白馬、黒馬、まだら馬の三頭の馬が餌の草を食む、庭では三匹の鼠が馬を洗っている様を描く。なお、本画面の後半部の本文には、「五十もとのたかへやあり」と、鷹を飼うくだりが記されているが、該当する図は描かれていない。慶應本も本図と同じ構図である。第四図は、男が、開いていた中門から屋敷の奥を覗き込んでいる場面である。本文、「七ほうのきよろくにへうとらのかはをしかけたりせんすいにはいせしまさいかいの大いしをあつめてつくりあけたるさしかけにれいとうけきしゆの船あり」に相当する。本図は二紙分の長大図で、畳を敷いた部屋には、虎の皮を敷きかけた曲枱、碁打つ鼠、欄干で庭を見る鼠などが、泉水には龍頭鷓首の船が浮かぶ様などが描かれ、中央画面の障子には水墨画が画中画として描かれている。なお、本図以降の図では、男は描かれていない。第五図は、恵比須が狛犬に命じて、鼠を地獄に落とすために、平田舟や釣り針の糸で罾をしかけた場面である。西の宮に棲む鼠が恵比須の盛り物を盗んだので、狛犬がそれを懲らしめたところ、鼠の親が子鼠のしたことなると怒り、西の宮の社壇を子鼠に命じて打ち壊した。今度は、恵比須が怒って、平田舟や釣り針の糸で罾をしかけのであった。本文、「ひらたくなみいをちこくにおとしにした、め糸ひすとの、ちうたいのつりはりのいと、もをわなにこしらへてこ、かしこにかけをきうしろのかたより時のこ糸をとつとあくれば二三百のわかねすみきもをつふしにけまとひて」に相当する。右画面に鳥居のもとで、平田舟や釣り針の罾にかかる子鼠、左画面に西の宮の社殿と狛犬などの様を描かれている。第六図は、狛犬が恵比須の使者として、比叡山にいる大黒天に報告したところ、大黒天が打ち出の小槌を振りあげ、見事な白を出した場面である。本文、「うちての小つちをふりあけちやうとうたせ給へはさきのうすひき木よりなを見事なるをそいたさける」に相当する。中央画面、縁側に狛犬と鼠三匹、左画面には、

顔は三面、手に打ち出の小槌を持つ大黒天が描かれている。慶應本も本図と同じ構図である。第七図は、再び狛犬が比叡山に登り、恵比須の使者として、大黒天に報告をした場面である。本文、「こまいぬかさねてひゑいさんにいたりてかくと申ければ大こくおほきにふくりそしたまひて一日もそれかしかものといはむにあたをなし給ひてうちころし給ふをもこりくとかんになして一こんのうらみをも申さすしかるをこのちやうすほとのことにつけてさやうにおほせあるこそいこんなれ」に相当する。中央画面に、縁側にすわる狛犬と鼠二匹、左画面には、三面の大黒天が狛犬を指さして怒っている様を描く。慶應本も本図と同じ構図である。なお、本上巻末尾の画面左下隅に、「源小泉／大和大極」の印が捺されている。

(二) 下巻の挿絵の構図

第一図は、恵比須が竜宮城に使いを出して、八尋の熊罴を先陣とし、鱷、鯀などが西の宮に集った場面である。本文、「まつさふらひ大将にはいつれの神もしらせ給ひしものなりとて八ひろのうまわにせんちんなりちからはたれにもますのをくまのそたちにはあらねともすゝききやうたいうちつれたり(略)一のたにすまの裏ひやうこ西の宮にあつまりたりその勢いは十万八千よきとそしるしける」に相当する。右画面上に、須磨の浦、左画面には一の谷などを象徴的に描く。第二図は、恵比須が龍宮城へ助成を依頼し、軍勢を集めていたことを聞いた大黒天が、比叡山に各地に棲む鼠を集めた場面である。本文、「なるなるおのねすみ次郎あなすみを大将とさためてその勢十万よきいろくのはたのもんたはらさんたはらひやうくちなわますかたますかきれんちやくなんとをつけならへたるはたさゝせこはたとうけより山しなかも河にさしつとひてひゑいさんにそあつまりける」に相当する。二頭の馬に乗った鼠、旗を持った鼠などが比叡山へ向かう様を描く。第三図は、恵比須から使者が来て、大黒天に降参をすすめた場面である。本文、「大こくてんおほきによろこび給ひてさらはこのつはものともをかも川きらさかまでさしつかはしそくしか

ふみやふるへきとのおほせなりかゝりけるところにゑひす殿より御しゝやあり」に相当する。左画面下に、比叡山に集う鼠、左画面に、床几に座り、甲冑を身に付けた大黒天、中央画面に、大黒天に仕える鼠、右画面に恵比須からの使者、手前には、幕の外に比叡山へ集う鼠などの様を描く。第四図は、大黒天の使者が、恵比須に降参を勧めた後、猫の鳴き声に肝を冷やして逃げ帰る場面である。本文、「鳥井のあたりにとらけのねこゑうちあけてねうくとなきけるにきもをけし日ころはさしもはやしともふむ、あなれともたゝひとゝころにおとるこゝちしねうくゝのこゑみゝのあたりにひゝきておそろしきかきりなし」に相当する。本図は二紙分の長大図で、右画面に、甲冑を身に付け、床几に座る恵比須、その左右に頭の魚や貝で象徴された海の生き物が控える様、中央に、鳥居のもとで鳴いている猫、左画面に猫の鳴き声で恐れおののいて逃げ帰る馬に乗った鼠などの様を描く。慶應本も本図と同じ構図である。第五図は、恵比須軍と大黒天軍とが、それぞれ、四条室町恵比須、二条河原町大黒町に陣を取った場面である。本文、「ゑひすとののは四てうむろ町ゑひすはの町にちんをとり大こく殿は二てう河原町大こく町にちんをとりはたもなひかしはほをならへよまわりかたく申つけてようしきひしかりけり」に相当する。本図は二紙分の長大図で、右画面に四条室町に陣取った恵比須軍、その中央に龍に乗った恵比須、左画面に、二条河原町大黒町に陣取った大黒軍、その中央に象に乗った大黒天などの様を描く。第六図は、布袋和尚が戦の仲裁に登場した場面である。本文、「れきくゝたる両神の中あしきこそ心えねふくの神のいさかひはひんほう神のさいはひなりそのそのおこりをたつぬれはわつかの事よりおこれりそうしてわさはひはしもとしてかならずはからふもの也あまたのいはれあるものをひらにわたわたし給ふへしふうわにひねくは仏たうのをきてなりとねんころにの給へはちからおよはす両ちん和平のちかひそあやかたき」に相当する。右画面に四条室町に陣取った恵比須軍、その中央に布袋と対峙する恵比須、左画面に、二条河原町大黒町に陣取った大黒天軍とそれに仕える龍宮城からの援軍の魚・貝類、その中央には床几に座る大黒天、左右に、

鼠が控えるなどの様を描く。慶應本も本図と同じ構図である。第七図は、宴席の場で、恵比須が行司となって、大黒天と布袋和尚とが相撲を取っている場面である。本文、「いさやむかしをおもひてのすまふをはしめ申さんとしてえすとのはきやうしにて大こくほいてい立あかりとり給ふすまひには大そりこそりみつくるまかものいれくひはまかせの手四十八手をとりくたき十二のひてんをあらそひてたかひに聞ゆる手とりなればさらにせうふもなかりけり」に相当する。右画面に、鼠と蛸、画面中央に、鯛と行司役の恵比須、左画面に大黒天と布袋和尚が裸になつて相撲を取る様、奥に、水墨画で描かれた矩形に海浜の様、左手前に、打ち出の小槌、俵などが描かれている。なお、本下巻末尾の画面左下隅に、上巻と同じく、「源小泉／大和大極」の印が捺されている。

三、國學院本『かくれ里』詞書書写者と末尾の印記

本節では、國學院本『かくれ里』、國學院大學図書館所蔵『住吉物語(三冊本)』(國學院本『住吉物語』・『判官都ばなし絵巻(一軸)』(國學院本『判官都ばなし絵巻』)、それぞれの冒頭の詞書と末尾に捺された印記の検討を通して、國學院本『かくれ里』詞書書写者について考えてみたい。

國學院本『かくれ里』と國學院本『判官都ばなし絵巻』は、料紙が金泥草花文様下絵入斐紙、上下に金箔砂子、一紙の寸法が縦凡そ三十二糎、横凡そ四十八糎、一行十二字前後と、江戸時代前期(寛文・延宝期頃)の大型物語絵巻と同じ体裁を有している。両物語絵巻は、参考図《『かくれ里』詞書の書写者》に示したように、「乃」・「无」(「毛」)・「遠」・「年」・「美」の崩し方が同じである。また、大型の冊子仕立てである國學院本『住吉物語』における、「乃」・「无」(「毛」)・「遠」・「年」・「美」の崩し方も、國學院本『かくれ里』と同じである。論者は、かつて、國學院大學図書館

所蔵『咸陽宮』と、國學院大學図書館所蔵『舟のゐとく』・『呉越絵』との生成過程における関係を論じた際に、「國學院本『咸陽宮』は、『舟のゐとく』や『呉越絵』と同じく、料紙の趣向をはじめ、一紙の行数、字数など、江戸時代前期（寛文・延宝期頃）の大型物語絵巻の体裁を有している。また、三つの作品における、「乃」、「代」、「民」「國」などの文字の崩し方も酷似し、また、漢字の振り仮名の方法も同一である。」⁶⁾と、國學院大學図書館所蔵『咸陽宮』・『舟のゐとく』・『呉越絵』の詞書書写者が同一人物である蓋然性を述べたことがある。國學院本『かくれ里』と國學院本『住吉物語』の詞書書写者も、同一人物であると推定される。

國學院本『かくれ里』には、参考図《絵草紙屋「小泉」印記》に示したように、上・下巻のそれぞれの末尾の画面左下隅に、「源小泉／大和大極」の印が捺されている。⁷⁾この印記と同種のものが、國學院本『住吉物語』と、國學院本『判官都ばなし絵巻』にもある。國學院本『住吉物語』には、各冊末尾に、上部に陰刻「源小泉／大和大極」、下部に陽刻「烏丸通櫻馬場町／御繪雙紙屋／大和大極」と捺され、『判官都ばなし絵巻』には、巻末に「藏宝藏／七左衛門尉／安信」（朱方印）と「小泉」（朱円印）とが捺されている。國學院本『かくれ里』と國學院本『住吉物語』の「源小泉／大和大極」の印記は同一のものであるので、この大型の絵入り物語絵巻と絵入り冊子本は、同じ絵草紙屋、工房で製作されたといえるであろう。また、中部義隆氏は、富美文庫蔵『大職冠絵巻』に捺された「藏宝藏／七左衛門尉／安信」の印記について、『古畫備考』¹⁰⁾に掲載されている資料をもとに分析され、この印記が製作工房の商標であると論究されている。¹¹⁾國學院本『かくれ里』詞書書写者は、御繪雙紙屋「源小泉／大和大極」につながる人物であると推定される。

なお、石川透氏は、國學院本『住吉物語』の詞書書写者が朝倉重賢であるとされた上で、詞書書写者を朝倉重賢とする他の絵巻・絵本について、「現在までに知り得た、城殿和泉塚の印記をつ絵巻物六点のうち、四点は朝倉重賢筆

の絵巻物の詞書きの筆跡と一致する。城殿和泉塚の箱書をもつ絵巻物の三点のうち、二点は朝倉重賢筆の絵巻物の詞書きの筆跡と一致する。合計、九点中六点までが朝倉重賢筆の詞書きなのである」と指摘し、印記「城殿」と、詞書書写者である朝倉重賢との関係について注目されている。

右のように、國學院本『かくれ里』、國學院本『住吉物語』、國學院本『判官都ばなし絵巻』、それぞれの冒頭の詞書と末尾に捺された印記の検討をふまえると、一つ、國學院本『かくれ里』二軸の詞書書写者は朝倉重賢である蓋然性が高く、二つ、朝倉重賢は、京都、烏丸通櫻馬場町の御繪雙紙屋「源小泉／大和大極」に何らかの形で属していたものと思量されるのである。

註

(1) 東京大学国文学研究室所蔵『かくれ里』の翻刻については、横山重・太田武夫両氏編『室町時代物語集五』三九四～四〇七頁（大岡山書店、昭和十七年）による。なお、島津久基氏により、『かくれ里』の諸本、素材などの総合的研究がなされている（『近古小説新纂考説』「かくれざと」四四五～四六一頁、有精堂出版、昭和五十八年）。

(2) 慶應義塾図書館蔵『ゑびす大こくかつせん（鼠のさうし）』の翻刻については、石川透氏「慶應義塾図書館蔵『かくれ里』解題・翻刻」（『三田国文』三七、平成十五年三月）がある。また、石川氏は、書名『鼠のさうし』の由来について「箱書「鼠のさうし」（鼠が大黒天から加勢の要請を受けるなど鼠が登場する）は幸田露伴（1867-1947）の筆によるもので、露伴自身ないし、露伴の弟で、経済史学者幸田成友の許に置かれていたものようである。『室町時代物語集』では幸田成友所蔵とされており、詳細な経緯は不明であるが、野村兼太郎収集資料として慶應義塾図書館に登録・整理され、今回、文学部古文書室へ移管されたものである」（『慶應義塾大学文学部古文書室展Ⅰ 野村兼太郎収集資料の世界』平成二十五年九月）と解説されている。

(3) 早稲田大学図書館蔵『ゑびす大こくかつせん』の翻刻については、『室町物語大成第三』五三～六二頁（角川書店、昭和五十一年十月、再版）による。

- (4) 都立中央図書館蔵『かくれ里の物語』の本文内容、挿絵の構図について、塩川和広氏「『かくれ里』の研究―諸本を中心に」(『立教大学日本文学』一〇五 平成二十二年十二月)の学恩をいただいた。なお、塩川氏は、東大本、慶應本、早大本、加賀本との関係について、「その書写された年代は東大本と慶應本がほぼ同時期、早大本がやや時代を下って刊行されたと見られる。さらに加賀文庫本はこれらの元となった祖本の本文をそのまま引き継いでいると考えられ、さらに加賀文庫本と東大本の関係から、挿絵についても古体を有していると言える。加えて、先に述べた『大黒舞』『梅津長者物語』における相撲の記述から想定される『隠れ里』の成立年代をあわせて考えると、明暦二年刊行とされる加賀文庫本は『隠れ里』諸本の中でも早い段階で成立したと考えられる。さらに版本という比較的手ししやすい流通形態をとっていることから、他二本が加賀文庫本をもとに製作された可能性は少ないのではないだろうか。」と、加賀本を祖本として、『隠れ里』系として東大本と慶應本を仮定し、早大本を『恵比須大黒合戦』系と論究される。
- (5) 物語絵巻『かくれ里』のもととなった『隠れ里』そのものの成立について、島津久基氏は、「鼠共の評定の席に蝙蝠の四郎が飛んで来る挿絵の説明にねつみのかくれさと、かうもりの四郎とひ、ねつみ共なげき、とある(むろんそれは隠れ里での事では無いのを誤り註したのである)に看みても、此の刊本が本書から出たものであることは言ふまでもなく、此の刊本の底本も本書に先だつものではないことが断ぜられる。」(前掲註(1)書 四五九頁)と、論究されている。
- (6) 慶應本の挿絵の構図は、「慶應義塾大学文学部古文書室展Ⅰ 野村兼太郎収集資料の世界」(平成二十五年九月)によって公開されているものを参考にした。感謝申し上げます。
- (7) 國學院大學図書館蔵『判官都ばなし絵巻』一軸の書誌については、「³¹⁶判官都ばなし絵巻」(『國學院大學創立百三十年記念國學院大學所蔵古典籍解題中世散文文学篇』六一四・五頁 國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター 平成二十六年三月)を参考とした。
- (8) 針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『咸陽宮』の解題と翻刻」(『國學院大學 校史・学術資産研究』第六号 國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター 平成二十六年三月)。
- (9) 「小泉」の印記は、現在世界で確認できるものとして、ボストン美術館所蔵『天狗の内裏』二軸、フリーア美術館所蔵『玉藻の前』二軸、慶應義塾図書館所蔵『友長』二軸など、十点到満たないという(第四編 太平記絵巻卷奈良絵本・

絵巻類 第二章 草紙屋城殿の周辺」『奈良絵本・絵巻の成成』三弥井書店 平成十五年)。また、針本も、「穂久邇本」[か
んやう宮]の巻末に、「城殿」の印記があり、朝倉重賢が詞書書写者として推定される。國學院本「咸陽宮」も、新作「咸
陽宮」を商いした「城殿」なる絵草紙屋の制作になる蓋然性がなくはないであろう。しかし、國學院本「咸陽宮」の詞
書書写者は朝倉重賢のものとは断定できない。ただ、國學院本「咸陽宮」の詞書書写者が國學院大學所蔵「舟のあとく」・
「呉越絵」のそれと同一であると安易に言うことできないものの、これら、新作と思量される絵巻の制作に関わる絵草
子屋が存在していたとはいえる。」(針本前掲註(7)論)とも述べたことがある。

- (10) 参考資料に掲げた『古畫備考』収載の「蔵宝蔵／七左衛門尉／安信」(朱方印)と「小泉」(朱円印)は、増訂版『古
畫備考』(三一 浮世繪師傳 千四百二十二)を用いた。なお、『古畫備考』は、江戸時代末期狩野派の狩野栄信の次男、
朝岡興禎による画人伝である。

- (11) 「七左衛門尉／安信」の印記は、富美文庫蔵「大職冠絵巻」にも捺されていると、中部義隆氏の指摘があり、「大職
冠絵巻」(富美文庫蔵)の下巻の巻末には、二つの印が捺されています。一つは「小泉」重廓円印、「安信七左衛門尉」
重廓長方印です。「小泉」は楷書体、「安信」は篆書体、「七左衛門尉」は行書体と異なる書体で記されています。この
二印が絵画工房の商標であり、主宰者の名を示すとすれば、「小泉七左衛門安信」になります。天文五年(1536)
に描かれた日蓮上人註画賛(本圀寺蔵)五巻の巻末に奥書があり、「画工洛陽絵所窪田藤兵衛尉統泰」と記されています。
「画工」は「洛陽」すなわち京都で「絵所」を主宰する「窪田藤兵衛尉統泰」ということです。この標記の形式は、「小
泉七左衛門安信」に通じることから、「大職冠絵巻」(富美文庫蔵)が室町時代後期の「洛陽絵所」の系譜につながる絵
画工房であった可能性があります。」(中部義隆氏「(研究ノート)「大職冠絵巻」(富美文庫蔵)と七左衛門安信」『季
刊 美のたより』一六八 大和文華館 平成二十一年一〇月)と、制作工房について論述されている。

- (12) 石川透氏「國學院大學図書館所蔵の奈良絵本・絵巻」(針本正行編『物語絵の世界』七七〜八六頁 平成二十二年)
のご論の成果に基づく。

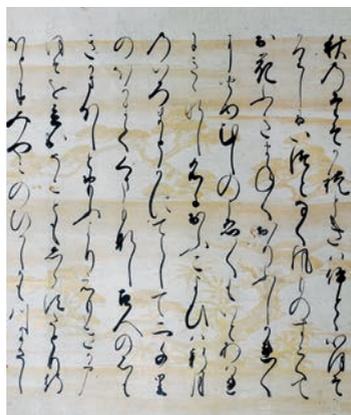
- (13) 石川透氏「第四編 太平記絵巻奈良絵本・絵巻類 第二章 草紙屋城殿の周辺」(『奈良絵本・絵巻の成成』三弥井書
店 平成十五年)。

- (14) 石川透氏は、前掲註(2)論で、慶應本「隠れ里」の詞書書写者について、「奥書などはないが、国文学研究資料館

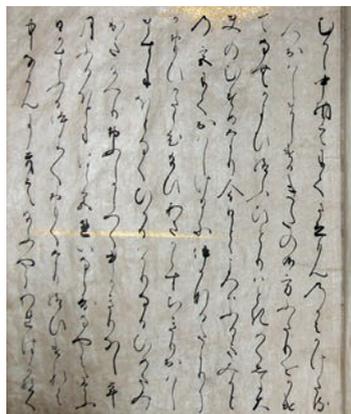
蔵『羅生門』等にその署名がみられる、朝倉重賢の筆跡に近似している。私の整理では、朝倉重賢の書写絵巻のうちでも、その初期に写したものであろうと推測している。」と、朝倉重賢筆と指摘されている。朝倉重賢は、慶應本『かくれ里』と、國學院本『かくれ里』と、二点の同一の物語絵巻の詞書書写者として制作に与っていたことになる。なお、朝倉重賢の書写本として、国文学研究資料館所蔵『羅生門物語』がある。辻英子氏は、「下巻末尾に「市丞朝倉重賢書之」と同文と同筆で記す。」（『国文学研究資料館蔵『羅生門物語』絵巻―解説と翻刻―』『聖徳大学研究紀要 人文学部』第七号 平成六年）と、朝倉重賢が絵巻の詞書書写者として活躍していた事実を指摘されている。

* 國學院大學図書館所蔵『かくれ里』をはじめ、國學院本『住吉物語（三冊本）』、『判官都ばなし絵巻（一軸）』などの閲覧、調査にあたり、古山次長はじめ図書館の方々に多大のご配慮をいただいた。あらためて御礼申し上げます。

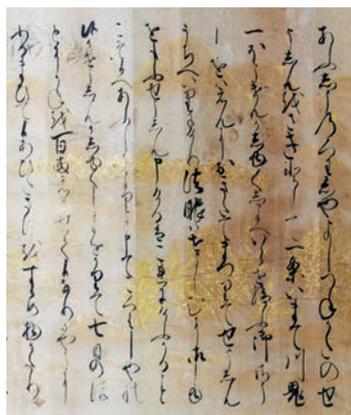
《『かくれ里』詞書の書写者》



『かくれ里』冒頭



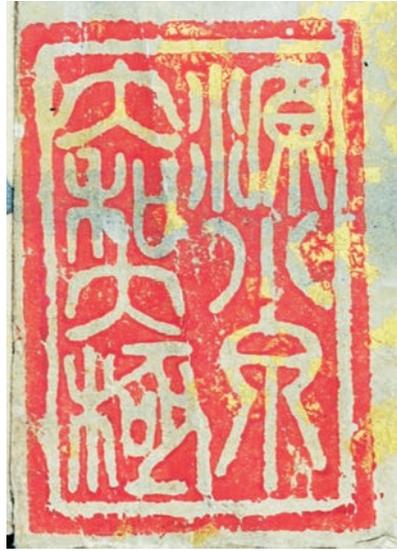
『住吉物語』冒頭



『判官都ばなし絵巻』冒頭

《繪草紙屋「小泉」印》

「かくれ里」印記



「住吉物語」印記



「判官都ばなし絵巻」印記



「古画備考」



かくれ里
翻刻

上卷

秋のたそかれときはいとゝ心ほそ
 かりしにいつとなく風ものすこくて
 お花ふきまねくおりふしかれく
 に聞ゆむしのこゑくもいとあはれ
 にきゝなし名におふこよひは新月
 のいろまとかにてらして二千里
 のほかまてくまもなし古人の心も
 きかまほしとおもふよりえもきかと
 ほそを立出そこともしらすたとり行
 ほとにみやこのひかしかも川にさし
 かゝりみつのなかれのいとふかきを

こしなかまてまくりあけてさ夜こ
 とに音をのみなく千鳥あしになり
 やうくうちわたりてみなみをさし
 てゆくほとにかの大佛や三十三間
 をゆん手にみなし一二のはしや
 ほうしやうしもみちいろこぎいなり
 山松にかゝれるふちのもりこわた
 の野辺に出にけりひかしのかたに
 物いふこゑ聞えたり我ならて又よの
 人も月にはあこかれてこゝらたと
 るらんうちよりてこよひをなかむ
 る哥あらはとおもひてたちより
 みけれとも人なしかしこなるきし
 のあるところを見やりたりければ
 さもおほきなる

あなありけり

そのうち

いとふしき

なる

音こそ

しけれ

(第一回)

そも是は人をまよはすきつねの住

なるふるつかにてやあるらんもしは

日ころ聞つたへしこの野へにはかく

れさともありともきくみやこに

かへりて物かたりにもなれかしうち

にいりてみはやとおもふ心出きて

さしあしになりつゝ半町はかりゆく

かとおもへはさしもひろきところに

出たり日は天にかゝりてくりなく照

し河水しつかになかれて又ふかゝ

らす是はそもひちやうはうかいひけん

こちうの天地けんこんのほかなる

くになるへしとおもひむかふをみれば

むねかといみしく立ならへたりあや

しく思ひて立よりもんのうちをそと

のそきたれは人もなしなをしもさ

しいりて大はんとこゝろにいたりけれ

はおほくのねすみあつまりてなへかま

すゑならへうほをきりみつをくみ

をく十二けんのとをさふらひにはとり

うさき白てうあまたかけならへをけ

とつほとはいくつもならへこほるゝほとに

さけをたゝへたりにはに立うすふたつ

すゑてよねをうつところもありそ

のよねうたをきけはおかしくもかた

はらいたくそおほえける

風もなふきそつゝみもかれそ

ときくさなへのはにはいなこ

もつきそとらけのねこのこゑ

をもいやよ

とうたひつれてあるふしのおもし

ろさこゑめつらかにほひありて

いきのはつむ

ことにて

ありと

なむ

(第二図)

又ひかしの方をみわたせは五十けん

むまやありもろこしうのほくわうの

天ちくにわたりし時八しゆんのめいは

にのり給ひけんそれよりすゑには

かんそ七十よとのたゝかひにかううの

のりしかううんすいわかてうにはいけ

すぎするすみよしつねの大きくろ小く

ろこれらのめいはをもあさむくほ

とのむまともををのくむまやに

立たりけり五十もとのたかへやあり

これ又むかしをいはうたのみかとのあ

さみとりよこ將軍の春かすみこれら

におとらぬたかともをかすくにすゑ

ならへ大たか小たかはいたかすゝみたか

はしたかつみゑつさいこのり野され

なんといふさまくのたか有あしをゝ

もとをしそろへつゝいつれもとほこ

にすへ置たりみやこのうちましてとを

きぬ中にもかゝるところあるへしとは

きゝもをよはすみもせされはゆめに

えいくわをきはむらんとさめなんの

ちぞくやしき

(第三図)

西のかたにまはりてみればおりふし
ちうもんはひらきてうちを見入たれ
はすいしやうのいさこをしきめなう
のいしをならへたりつりとのをたり
との玉のらんかんにこかねをこしり
とし白かねのはしらめなうのけた
さんこのうつはりこはくのむなき
すいしやうのみすにしんしゆのやう
らくをかけたたり六まのくわいしよには
大もんのたゝみをしき三ふく一つい
くわひんかうろをみかき立てならへたり
しよゑんにはんもろこしやまとのものゝ
ほんめんさうにはちんのまくらからにし
きのとのゑものをゝきたりそのかた
はらには七ほうのきよくろくにへう
とらのかわをしきかけたりせんすいに
は伊せしまさいかの大石をあつめて

つくりあけたるきしかけにれうと
うけきしゆの舟あり五しきの糸
にてつなきたりうへ木には月に花
さくかつらの木せんかのきくいゑを
らそひよし野のさくらおのへの奈つゆ
しもそめしくれなるのやしほの岡
の下もみちさいきやう法師かいにしへ
かれ葉の風をなかめたりしなにはの
あしの一むら在原の中将のあつ
まの旅に露わけしうつの山への
つたかえて花は木すゑをならへつゝ
にほひたかひにくんしたりきたより
つゝく山をみればたかねの雪はきえ
やらてまとにうつろふ梅かゝを君なら
はと匂ふらんのきにさえつるうくひすう
つはりにすくふつはめ井手のやまふき
みかさのつゝしおちくるたきにうつ
ろひてにしきをさらすことくなり

山のおさきはあらうみにてよせくる
 なみにきしをあらひほかけてはしる
 ふなよはひいそにはあまの塩たれ
 て玉もとりのいそなをつむしほ屋の
 けふりよこおれてわれやこふらんむ
 ねの火の思はぬかたにやなひくらん
 やまのうしろは炭かまなりかれはの
 もみちおりくへて立のほりぬるけ
 ふりのすゑもあはれなりうき世の
 ほかなるとをさとにもかゝることあり
 とは露しらすりけりと立やすら
 ひてなかめあたり

(第四図)

かゝりけるところにはやうちむまに
 のりてかけきたりあんないをこふ
 うちより立出てとをさふらひとおほし

きところにてものいふなに成らんと
 きゝゐたれば此ほとつのくにし
 の宮にすむねすみえひすとのゝもり
 ものをぬすみとる御まへなるこまい
 ぬこれを見ておほきにいかりほえけ
 れはちいさきねすみのことなれはおそ
 れまとひてにけゝるところにふるき
 井のもとにおちいりやうくろくち
 をつたひてぬれくとしてはひあ
 かりわかすむふるすに立かへり父母に
 かこちてなきさけふいかなるゆへそと尋
 れはにしの宮のはいてんのあたり
 こゝかしこあそひけるをこまいぬのかけ
 出てせなかをしたゝかにかみたりと云
 ねすみのおやこのよしを聞ておとな
 けなくもこまいぬとのたとひいかな
 る事ありとてもあれほとにいたひ
 けにしてありくわか子をなさけも

しらすかませ給ふ事こそやすからね
 そのきにてましまさはにしの宮
 のしやたんをかふりたふし鳥ゐの
 二はしらをもうちはせんとい
 かりければわかきねすみとも二三
 百はしり出てひそかににしのみや
 にしのひよりてしやたんのとひら
 とりゐなんとをかふる事ふかく
 いふはかりなしえひすとのこのよし
 をきこしめしにくきやつはらかしわ
 さかなそのねすみともを一ひきもに
 かすな地こくおとしさけなわに
 かけてこくもんにさらしとひからすに
 くらはすへしとばかり給ふこまいぬう
 け給はりひらたふねをちこくおとし
 にしたゝめえひすとのゝちうたいの
 つりはりのいとゝもをわなにこし
 らへてこゝかしこにかけをさうしろの

かたより時のこゑをとつとあくれば
 二三百のわかねすみきもをつふし
 にけまとひてちこくおとしにかけこ
 みてをしひしかるゝもありあるひは
 さけわなにかゝりてちうにふらりと
 なるもありあるひは手をおられあし
 をそこなひこしをうちおりはうく
 けうにしてかへるものわつかに五六十
 には過ぎりけり

(第五回)

さるほどにのこりしねすみともなき
 のなみたになりてにけかへるおやを
 うしなひ子をころされやすからぬこと
 かないかにしてかえひす三郎殿に此
 うらみをむくはんとたんかうひやうちや
 うするところこゝにかうもりの四郎

くちきのあそんとひきたりていふ
やうきのふうけ給はりしは伊勢の国
わたらひのこほりに月よみの宮とて
えひす三郎殿には御あになりこの
みやに御ちやをしんしらるへしとつかひ
のまいりけるにあすかならずちやの
ゆにわたらせ給ふなるよし御返し
ありてすきやのさうしなと中く
きれいさ申はかりなし又松風と云
ちやうすありかはしまと申引木有
これ一くのたから物たりこれにてちや
を引せ給ふへしとてはいてんにとり
出されたりいかにもはからひ給へといふ
ねすみ聞てそれこそねかふところなれ
さうちをせしすき屋にはあとより
ちりをまきぎちらし又ちやうすにはせう
へんをしかけひき木をはくひおりけ
れはなにのようにも立へしとおほ

えすえひすとののは御らんしてかやうな
らはあすのあさすきはみるていさん
くくにあるへしつかひを立て月よみの
宮をはまつくと、めたてまつるへし
とてにはかに人をつかはし給ふさても
ねすみとものしわさきたのかきりの
ふるまひこそ心えねかゝる大事の
たから物にさうなくをのれかせうへん
をしかけあまつさへ引木をくひお
りぬるこそいこんなれいそきこのやつ
はらをことくく打ころしねちくひ
にしてもはらこそゑねといからせ給ふ
さらはこのよしゑいさんの大こく殿へ
申たんしねすみともをことくをたん
さいにをこなはんためにこまいぬを
御つかひとしてゑいさんにそのほせ
らる大こく天神このよしをきこしめし
思ひの外大こくのきによくし給はて

いかにそれかしかめしつかふものさやう
 のあくしすへしともおほえすさりながら
 ちやうすひき木はの事はいかにもして
 そのうへたてまつるへしこれにてかん
 にんし給へとてうち手のこつちをふ
 りあげ一うち打給へはこんこたうたん
 なるちやうすひき木をこそは

いたされ

けれ

(第六回)

こまいぬあんにさおひしていそぎかへ
 りまいりてくはしく御返しを申ける
 はそもくねすみと申は大日きやう
 の六十心にはえしんととかれてもの
 をやふる人をはねすみの心にとへら
 れたりしゆそ両たんといふはせんかん

しよにしろすところうたかひおほぎ
 をなつたりされはらいきにねこ
 をやしなふことはねすみをとらしめん
 かため世といへりかゝるいたつらものを
 手まへにかゝへをきてししやとしあ
 まつさへさやうのことせましきとおほ
 せあるこそ心えね又つれく草に
 なくてもよからんものはくにぬす
 人家にねすみとこそいへわきはひお
 ほきものといふはたゝ此ものにきは
 まれりされはかゝらんことはをきく
 うへはたゝもとのちやうす引木をかへし
 給らんとかさねて御つかひをつかはし
 給ふへしといからせ給ふこまいぬかさね
 てえいさんにいたりてかくと申け
 れは大こくおほきにふくりうした
 まひて一日もそれかしかものといは
 むにあたをなし給ひてうちころし

給ふをもよし／＼とかにんして一こん
 のうらみをも申さすしかるをこのちや
 うすほとのことにつけてさやうにお
 ほせあるこそいこなれこのうへはその
 はうの御心したいなり又ねすみのこと
 ないてんけてんを引出しなにかとの
 給ふ事こそ心えねやふるこゝろをね
 すみにたとへ給ふ事は人の心のいさ
 めなり人の心のものやふりなるをね
 すみのことしとの給ふ人はかへつてえ
 ひすとのこそねすみなれと中／＼
 あつこうにをよひてつかひをおつかへ
 さんとし給ふか又ねこをかふてやしなふ
 はねすみのためとの給ふはたゝれいきの
 ことほり也ねこはねすみをくらふやく
 とさたまりしいはれなし人はかならず
 うほをくふものならすえひすのことく
 れうしをするものゝあるゆへ也のみ

しらみの人をくらふ人はのみしらみの
 ためにむまれたる也又なくてもくるし
 からぬものねすみにまさりてかすお
 ほしひやけこうすい地しんかみなりせ
 うまうのたくひこれなりねすみより
 なをなくともよからん天地はさなき
 もの也えらまさるをはみちとするい
 はんやものにはとりゑありせうまう
 のゆくにもあかきをとりにえにする
 かやあしからんねすみにもそのとく
 とりゑのあるゆへに十二しのその
 なかにねの一しを入られ正月のい
 はひにも子の日の松をそしやうくはん
 す四方をさすにもきたをもつてねの
 方となつけて水をやういくせしむる
 なりやくし十二神のうちひきや羅
 大将はかしらにねすみをいたゝきて
 子の時をまもり給ふ十一月のね

まつりもふつきをねかふにりしやう

あるゆへそかしのことはりをしり給

はぬゆへにふこつのことを申さるゝ

ことこそおかしけれどとへは日ころ申

たんする中なればすこし心には

さることをもかんにんし給ひてこそは

みちならめこのうへはそれかしか手のも

のにおゐてはゆひなりともさし

給はゝうらみたてまつるへしそのうへちや

うすひき木をはかたくそんし候はすと

中くいかりの給へはししやのこま

ぬけうにして御まへをまかりたち

にしのみやさしてかへりつゝ

しゝうのこさいを

のへたり

けり

(第七回)

下巻

さるほどにこまいぬはいそぎにしの

宮にはせかへりこのよしかくと申

ければえひ寿三郎とのおほきに

いかり給ひてそのきならば津のくにせ

いをことくふみつふしそのち

つはものをあつめてゑいかくにをし

よせしゆうをけつせんになんのした

いあるへきなんち身内のせいをもよ

ほしふるへきよしおほせふくめらるゝ

ににしの宮は申にをよはず津の国

すま一谷わたなへかんささきふくし

ま江口よとやまたやまささきのねすみ

とも此よしをきゝとるものもとりあへ

すおやをつれ子をかゝへてゑいかくに

にけのほる事おひたゝしえひす
 とのきこしめしさらはくんせいをあ
 つめんとてまつりう宮へししやをそ
 立らるゝりうわうはきこしめしかゝる
 ふしきの事こそあらね日ころはさしも
 一しよに住ゐしてふくの神とあふか
 れ鳥のつはさのことくにてひとつかけ
 てはかなはぬ事そかししかるに今この
 ことの出来してたかひにつはものを
 あつめ給ふそめつらしきちんしなれ
 さりなからのかるへきにあらすいそき
 せいをあつめよとてそうかいにふれ
 をなしそのせいをめさるゝにまつ侍
 大しやうにはいつれの神もしらせ給ひし
 ゆうなれはとて八ひろのくまわに
 ちからはたれにもますのうほくま野
 そたちにあらねともすゝききやう
 たいうちつれたりかれらはかうのもの

ときくからになよしと人やおもふらん
 こゑもかれいとよはゝるはいくさふきやうの
 ためならんつかひはんのそのため
 すはしりをもめされたり名はさきた
 ちてとひうほやくきにいつもかつう
 ほときけはまことにまなかつほはかり
 ことまでふかのうほそのほかにほも
 いるかかまつかくしらはまちをさきと
 して中にもたいは伊勢むしやにて
 火おとしにそみえたるいろこあかめやち
 のたいくろたいまてめされたりさて又
 かひの一もんにはにしさゝいしたゝみかひ
 ふねをもよほせほたてかひ四かひあ
 まねく太平かひおさまる御代に
 あかひかひかきやはまくり夜うち
 をさせぬ夜なきかひこのものとも
 をさきとしてほらのかひをふきならし
 たこいかの手のはたさゝせさはらか

に出たちのすくれてみゆるかふと
 かひしまかいらきのすねあてしやちほ
 こかまほこさしあけさはのをの矢し
 りをときたちうほをかたらひよりて
 こしにさしきよりによりあひて一
 のたにすまのうらひやうこのうらにし
 のみやにはせあつまりしそのせい

十万八千よきと

そ

しるし

ける

(第一回)

大こくてんはこのよし聞しめしおほきに
 いかり給ひて三めんのかたちをあらはし
 ひえの山にしやうをかまへ宮このう
 ちのねすみともをあつめ給ふにそのかす

すくなしさらはかくれ里につかひをたて

よと下知し給へりよつてはやうちき

たりてかくと申けはかくれ里のね

すみともおとろきいそきつはものをあ

つめて大こくてんにたてまつるおね

らこねらおねの子しろねすみくろね

すみ野ねすみ山ねすみはつかねすみ

をさきとしてわれもくと出たちたり

そのなかになるおのねすみ次郎あな

すみを大将とさためてそのせい十万

よき色くのはたしるしたわらさん

たわらなわめますかたますかきれんち

やくなんとをめんてのしるしとし

てをのくこはたをそさいたりけるさ

るほとにこわたたうけより

山しな日のをかを

うちすきて

かも川を

わたして
ひえいさん

にそ

あつまり

ける

(第二図)

大こくてんおほきによるこひ給ひて
さらはこのつはものともをかも川きら
らさかまでさしつかはしそくしに
ふみやふるへきとのおほせなりかゝり
けるところにえひす殿より御ししや
ありそのことはに云

そもく年月御へんと一しよにあり
て千よ万よのすゑまでもかはらしと
ちかひしにかゝるふしきの出きたりし
事はひとへに佛りきのほんいにた

かへりしかるにそれかしと申はかたしけ

なくも天神七代伊さなきいさなみ

のみことには第四のみこ也御あねき

みは伊せのくにわたらひのこほりに

ましますこともおろかやきこしめし

およはれんうちもけいも天下にお

そるへき人なし大こくとのはそのかた

ちのいやしきいろくろくせいひきく

よこはたかりにみえ給ふはくしらのわ

きりにさもにたり手にもち給ふは

なになるらん家なとつくるはんしやう

のさいつちとや申へきかたにかけ給ふ

は日ころこのませ給ふなるすはまどち

まめさたうまめとうふなんとや入給ふ

さて又あしにふまへ給ふはなにを入

たるたはらそや干こくまめのくちかけ

のやはすのまめやおさめけんもしそ

れならずはねすみとのひやうらう

のそのためにこぬかのたくひやいれ
 られけんかゝるきたなきことをこのみし
 人に日ころはかんにん申せしはまこと
 にうき世のふせうとそんし也されは
 このいくさに御出あつてたゝかひ
 給ふともあしみしかくましませはあひ
 るのことに見え給ふかけひきしゆう
 なるましきにおなしくはかうさんしい
 のちをつかはゆるしをくへしとぞ申
 されける

(第三回)

大こくてんからくとわらひ給ひて御
 返しは是より申たつすへしとてつ
 かひをかへされあなすみの二郎をめし
 なんちをつかひにつかはすへし馬
 にのりていそきゆくへしねこ太郎

にゆきあふなとひのすけもある
 そかしなと、申ふくめられその返し
 に云
 御つかひの申ところふんみやうならす
 日ころはさしも一しよにありいのちを
 かけてあひたゝかひにかはらしとこそ
 ちかひつれ思はするほかの御くはたて
 によてすくにいくさにのそむ事
 ほどけのいましめにそむけりされは
 さんきさんげのこゝろをはたちまち
 に引かへにんにくしひのかたちを
 あらためてとうちやうかうふくふた
 うのくちのよろひしんいかうしやう
 のほこたてをならふる事はつみとか
 のほともおそろしく侍りしかるにえ
 ひす殿の御けいつの事うけ給はり
 と、けたりそれかしかてかおとるへき
 おそらくは天にありてはしゆみせん

いたゝきに座して三十二神にあふ
 かるゝたいしやく天わう也むかししやく
 そんなちくに出給ふその時はまかきや
 らてんとなつたり此日本にありて
 は一さいしゆしやうのねかひをかなへんと
 かたちをかへてあらはれたりそれたう
 りてんのきけんしやうと申は大らくし
 さいのところにて百みのおんしきに
 みちくたりさけには天のしゆたみ
 とてそのあちはひかんろのことし此
 人けんのうちにしてならもろにいたみ
 さけあまちしやうちうにんたうしゆ
 はかたのねりさけなんはんさけみりん
 ちうなどゝいへともさらにこれにしくは
 なしあまの羽ころも身にまとひては
 たのしみさらにつくることなしなにの
 とほしきことありまめのめしまめのくわ
 しをこのみてこれをくふへきやたゝ

これ人のしんくゝをもよほすことを
 あらはせりあしにふまへしたはらこそ
 五こくしやうしゆのことはりなれ又かたに
 かけたるふくろにはしゆしやう長おんの
 くすりをいれふうふしのくとくを
 そ給ふ手にもちたるつちはによいほ
 うしゆのかたちをしめし心のまゝにた
 から物をうちいたすもろくゝのしゆしや
 うのねかひをかなへこゝろにしたかふ
 いはれありえひすとのとむまれて
 三つのとしまてあしたゝすほねも
 なくいやしきなによそへてひるこの
 みことゝ申せしはいかならん父母これを
 にくみてあまのいはくすふねにのせ
 て大かいになかしすて給ふをりうしん
 あはれみてとりあけてやしなふにや
 うくゝ人とならせ給ひにしの宮にまし
 くゝしよこくのあき人のうんしやうを

うけて月日を、くり給ふ風すさまじく波あらきおりふしは浜への岩に座をしめてうほをつりて日を、くるふせいとしてけいけつはさのみいるましきうちよりそたちといふなればあまりゆゝしきこともなしたゝとにかくに世にまかせかうさんし給へそれさなきものならば御うんは立どころにちゝまるへしと申すてゝあまりのこのいふとさにおをすへてあなすみははいけのこまにうちかへらんとするところにとりいのわきにとらけのねこ小太郎かこゑとしてねうゝとなきけるにきもをけし一ところにおとる心ちしてなくゝゑいさんにしさかもとにそつきにける

(第四回)

かくて両方のつはものともたかひにひやうちやうしけるはをしよせてやよからん又しやうくはくにまちうけてたゝかはんなどゝくんきまちゝ也ふるつはものゝ申けるはとかくてきをしやうちかくよせてあしかるへしたゝをしむけてたゝかはんとてえひす殿の御手は四てうむろ町えひすのちやうにちんをはり大こくてんは二てうかはら町大こく町にちんすいづれもはたをなひかしほこをならへわれさきにとせんちんをあらそふてい也かくて三てうたかくらとをりゆんてはとみのかうちめてはひかしのとうゑん是そくつきやうのいくさはなりたかいに名をしりしられたるつはものともなれはいさみてこそはひかえたれえひす殿のしやうそくには

もよぎ匂ひのはらまき草すりなかに
 きなしおり糸ほしを引かふてこかねつ
 くりのたちをはき八ひろのこまわに、
 白かねのくつわをはませ出たち給ふ大
 こく殿のしやうそくにはにしきのひた、
 れにくろかはおとしのよろひをきはち
 まきむすとしめ大さうにめされたり兩
 ちんのつはものともいくきはなをちら
 すへしとかたつをのふてそみえたり

ける

(第五図)

かゝりけるところにもろこしのほていくわ
 しやうはみろくほさつのけけんとし
 てせんほうのそしなり日本にわた
 りやまどのくにかた岡のたるましに
 さんけいしそのつゐてにほつ京の

五山をも一けんせはやとおほしめして
 木津かはをうちわたり井手の玉水
 さし過てふし見こはた藤のもり道
 なれはとてまつとうふくしをけんふつ
 し給ふむかししやう一こくしもろこし
 のきんさんしをうつし日本にわたした
 まふつう天のはしうちわたりきたの
 もんに出給ひてそれよりもいなり
 山をめてにみてほうしやうし一二の
 はし大佛三十三けんうちすきて
 五てうのはしをわたらんとし給ひし
 かまつなんせんしにまいらはやおほし
 めしきたをさしてあゆみ給ふところに
 みやこのうち三条わたりにむまけふり
 おひた、しくみえたり人に尋ね給へは
 しかくのこと、こたふほていきこしめし
 かのえひす大こくは久しき世より
 のともたちにてもろこしにわたられ

し時もそれかしちいんにまかりなり
 金山寺いわうさん五たいさんそのほ
 かところ／＼のきうせきをみせたる
 ことのありしそやあつかひ申さはや
 とおほしめしとるものもとりあへす
 両ちにわけいりていろ／＼和たん
 をくはへ給ひけりそれ神佛二道の

おもむきあらそひなきをもとゝすさ

れはねはんきやうにあたをもつて

むくふ時はあたつるにつきす草を

とつて火をけすかことしといへり又法

句経には百たひたゝかふて百たひか

つともしかし一たひしのはんにはといへ

りれき／＼たる両神のなかあしき

こそ心えねふくの神のいさかひは

ひんほう神のさいはひなりそのおこりを

たつぬれはわつかの事よりおこれり

そうしてわさはひはしかとしてかならず

はからぬもの也あまたのいはれあるも
 のをひらにわたんし給ふへしにうわに
 むにくは仏たうのをきてなりとねん
 ころにの給へはちからをよはす両ちん
 和平のちかひそありかたき

(第八回)

このうへはをの／＼中をなをり給へ
 と申させ給へはまことにこのうへはし
 さいにやをよふへきとの給へはまつお
 もふなかにはかきをせよといふ事
 ありあまりちかきはくせちのもと
 めとをきは花の香といへりすこし
 は一たち給へとて大こくとえひすの
 御てんのあひたにへたてのいたを
 そかこはれけるさても和平のことな
 れはほていくわしやうそれかしのしゆ

くしよへ御いりあれとてえひす大
 こくもろともに二てうとみのこうち
 ほてや町にしやうしたてまつり御
 さかつきをそいたされけるめくれやく
 さかつきの千世もかはらぬときは木の
 えたまさかゆるわかみとりひさしき
 世までもはひこりてさかへん事こそ
 うれしけれとて哥ひあそひ給ふいさや
 むかしをおもひてのすまひをはしめ
 申さんとてえひすとはきやうしにて大
 こくほてい立あかりとり給ふすまひ
 には大そりこそりみつくるまかものい
 れくひはまかせの手四十八手をと
 ぐたき十二のひてんをあらそひて
 たかひに聞ゆる手とりなれはさら
 にせうふもなかりけりかくて時うつ
 りけるほとにえひすとのうちわを
 あけさてもとりたり二人ともに取

たりくとかんし給ふ御こゑみゝのあ
 たりにとまりてねさめのとこにま
 くらをあけつらくこれらをおもふに
 くわうりやうか一炊さうしかこてふ五
 十年も百年もうしのよたれのはて
 もなく松のはのちりうせず

つきぬ御代こそ

めてた

けれ

(第七回)